

幼 児 の 教 育

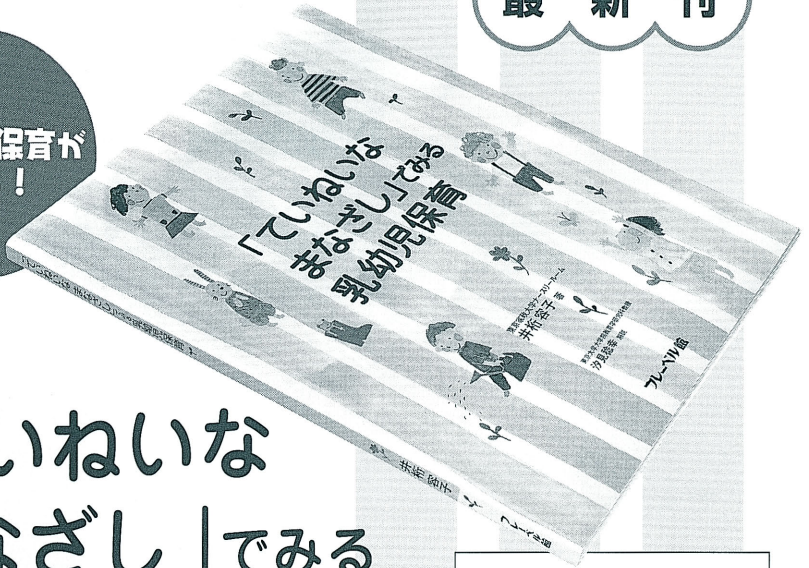


家庭・保育所・幼稚園

8
2005

最新刊

赤ちゃん保育が
わかる!



「ていねいな まなざし」でみる 乳幼児保育

AB判(26×21cm)
80頁
定価1,890円(税込)

井桁容子 (東京家政大学ナースリールーム主任) / 著
汐見稔幸 (東京大学教授) / 解説

ビデオ撮影による乳幼児保育の記録。園児の遊びの様子、他児や保育者などのかかわりの様子がつぶさに観察、分析されており、「どのような視線で子どもをみればよいのか」がわかります。赤ちゃん保育を実践するうえで、必見の本です。

今度は手首をつかって
上向きにして投げます。



本文より



次は後ろ側に!



本体が動いているうちに、今度はふたを!

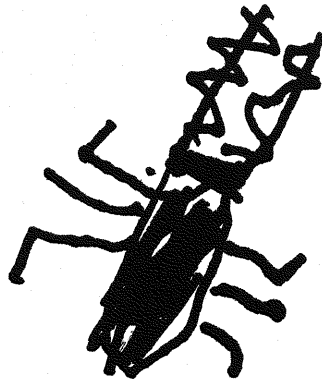
キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第104巻 第8号



幼児の教育 目次
——第一〇四卷 第八号——

© 2005
日本幼稚園協会

巻頭言 教育機関の著作権等について……………江波 諄子…(4)

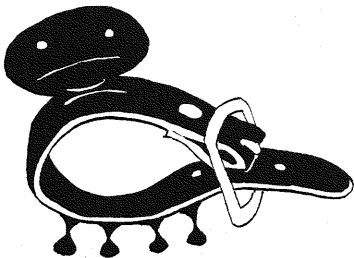
ある日……………(8)

私が通った幼稚園・保育園(3) 思い出の味いろいろ……………宮里 暁美…(10)

子どもの写真に見る大人の眼(1) —記録としての写真から—…荒川志津代…(17)

幼児教育の独自性はどこにあるのか(3)

子どもが動物を好きな理由……………矢野 智司…(24)



十文字学園女子大学 堀合文子先生・本田和子先生講演会

『新しい時代に生きる子どもをどう育てるか』

—教育における発想の転換— (4) …………… (30)

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(5) …………… 庄籠 道子… (39)

特集〈緑蔭図書紹介〉

他者との関係が、ことばを生み、「私」をつくる…………… 村松 賢一… (44)

神谷美恵子さんとの出会い…………… 岡田 誠治… (48)

「現場」の声を聴くこと 実践を物語ること…………… 矢萩 恭子… (52)

網野歴史学への誘い…………… 榎田二三子… (56)

マイ・ディア—二人のへ女の子—…………… 菅 聡子… (60)

表紙絵／中井絵津子

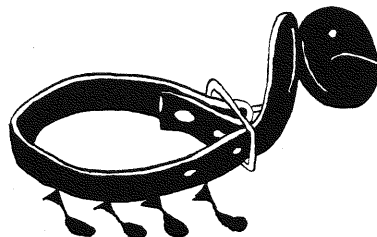
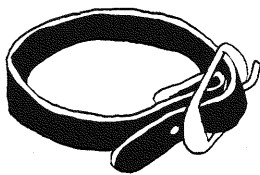
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「はねるベルト」

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子





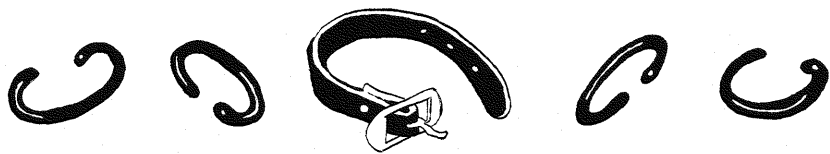
巻頭言

教育機関の著作権等について

江波 淳子

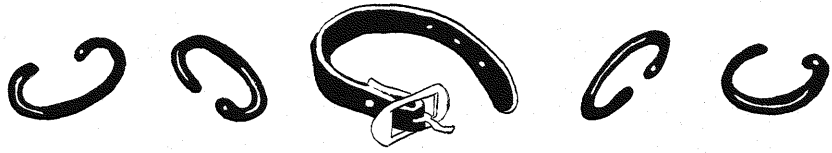
昨年の初夏、これまでの研究人生の総まとめとして、私は保育の幼児理解に関する書をあえて一般書として出版しようと決意した。出版社との最終の取り交わしの段階になって、著作権等の問題が提起された。なるほど、今回の私の本は、過去三十年以上にわたり教室で得た学生の幼児期のエピソード記録と幼稚園児が描いた絵を中心としたものだった。

著作権や肖像権についての問題に私が具体的に出くわしたのは、一九九三年のことである。かつて私はアメリカ留学中に大学附属ナーサリースクールで働いていたので、懐かしくかの地を訪れた時だった。留学時は、日本に持ち帰るために保育中に写真をパチパチと撮っていたので、往時とすっかり様変わりした保育室を撮ろうとカメラのシャッ



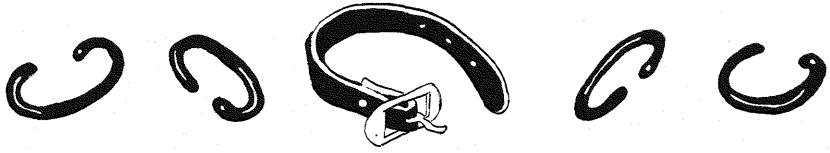
ターを押そうとした途端「ノー！」という大きな声で止められたのである。

さて、出版社の言うことは尤もだが、過去三十年間の卒業生から許諾をとる作業が可能なのか？ 私は頭を抱えた。「多分無理でしょう」と若い社員に即答した。そのまま原稿は部屋の隅の段ボール箱の中で眠ってしまった。八月になると、私はいつしか許諾を得る作業に取りかかっていた。黄ばんだわら半紙に書かれている番号と名前をたよりに、同窓会の名簿とつきあわせ、住所と電話番号のリストを作っていた。私は心を込めて彼らに手紙を書いた。何故今、自分がこのような事を思い立ったのか。彼らが授業中に書いてくれた貴重なエピソード記録を私が散文形式に直した文をそえて、書物掲載の許諾をお願いした（ここで同一性保持権は消滅）。同意してくれるか本当にどきどきしたが、しばらくして続々と熱いメッセージと共に「掲載してもよい」というところが丸をつけた返信の葉書が到着した。一人を除いてすべて許諾を貰った。ところが私が最も掲載したい内容の一つを提供してくれた人が、小さな薄い字で「申し訳ございません」と「掲載して欲しくない」に丸をつけてきた。私は落胆したが、これは本人の意志を尊重する以外ないので諦めることにした。しかしそのエピソードの内容は実に美しく、はかなく、心揺さぶられる内容だったので、せめて私にだけでもこんなに美しい子どもの心があるということを教えてくれてありがとうと彼女に手紙で伝えた。ある夜、三〇〇キロメートル離れた場所に住む彼女から電話がかかってきた。協力できないけれど私が十五年もの間、彼女が書いた想い出話を覚えていてくれてありがとうということだっ



た。第三者から見たら本当にすばらしい、誇るべき経験なのに、彼女にとつてはあまりにせつなく、哀しく心の奥底に生涯しまっておきたかったのだという。私は、教師という立場で学生の心の中を覗かせて貰ったことに忸怩たる思いであったが、彼女の想い出の中の小さな女の子に私も出会えて本当に幸せだったと伝えた。今は亡きその女の子は、彼女の心の中に三十年生き続け、私の中には十五年生き続けていると話し、お互い目の前にいるかのごとく涙ぐみながら電話を終えようとしたその瞬間、彼女が「先生、どうぞ載せて下さい。ゆきちゃん（想い出の中の亡くなった女の子）も喜ぶでしょう」と言ってくれたのだ。私は又しても圧力をかけてしまったかと困惑した。そしてもう一度静かに彼女の気持ちを確認した。彼女の心は揺るがなかった。今やつと心の奥底の悲しみを出せる時が来たという。私は思いがけない事態の変化にうれしかったが、「これでよいのか」と深く考え込んでしまった。

さて次は、附属幼稚園の子どものスケッチブックの絵である。幸い大学内に著作権等に詳しい教授がいて俄勉強をすると、子どもの描いたどんな絵でも、著作権はその子どもにあるという。真似したら別の問題が持ち上がるのだそうだ。掲載の許諾は子どもと保護者から貰わなければならない。私は前年度の子どもたちのスケッチブックから、園の許可を得て百枚もコピーしていた。何とか方法はないかと考えるうち、卒園生は同窓会の時に、在園生は保育終了時に、遊戯室にコピーを貼り、自分のものを探してもらうことにした。もちろん作品のなかには迷子もあったが、卒園児は自分の絵がすぐ分かつ



た。子どもも保護者も喜んで協力してくれたが、私は保護者に尋ねてみた。「仮にお知らせしないで使わせて頂いたらいかが？」と。「ひとこと言っていたらいいほうがいいです」との応えだった。こうしてようやく晴れて出版の運びとなったのである。

今、私の大学では、学内で著作権等に関する研修会が始まった。専門家から先端の話を知ると、首を絞められるような厳しい事態も想定してしまう。教育・心理・福祉・保育の世界では大人（教師）と子どもとの間の信頼関係（誤ると上下関係）のもとにいと簡単に他人の人生を知りうる立場がある。細心の配慮が必要と心を引き締める一方、この度の経験で、私は保育の本質を再学習したような気持ちになった。それはこれから私たちが向かおうとしている訴訟社会は、難しい問題を孕んでいるが、一人ひとりが大切に守られる方向なのだ。保育の根本は、相手の気持ちや人格を十分に尊重することにある。幼な子の心は大人に優るとも劣らず人間的で、彼らはその心をもちつつ成長していくことを私達は知っている。だからこそ、彼らの存在を尊重しつつ人間関係を結んでいかなければならない。むしろお金が絡まないが故に訴訟もせず、先生という暴力（芹沢俊介氏の表現を借りると）に屈して、心傷ついている子どものないよう願わずにはいられない。なぜなら、他者から命（心）を委ねられて私達の仕事は成り立っているのだから。

（常磐短期大学）



ある日

摄影·平野 清



私が通った幼稚園・保育園(3)

思い出の味いろいろ

宮里 暁美

鬼に追いかけられ追いつめられ、両手をギョツとつかまえられた。

相手は力の強い男の子。ジリジリと後ずさりする私。背中は壁に押しつけられ、もう後には下がれない。絶体絶命のピンチ。

その時、どういはずみだったのか、ぐるっと半回転して相手と自分の位置が入れ替わってしまった。押されていたはずの私が、気が付いたら相手を壁に押しつけていた。

「あれ？ これってどういうこと？」。互いにそう思った瞬間、私は相手の手を放し、一目散に陣地へと逃げ帰っていた。

幼稚園の頃を思い出すと、いつも思い出す遊びのシーンだ。

ひよんなことから立場が逆転というのが面白くて、そんなことってあるんだ！ という驚きとともに、ずっと心に残っている。おとなしい女の子でも、ちよつとしたはずみで強い相手をかかわすことができるということに、うっすらと気付いた瞬間なのかもしれない。

のどかな町の、のどかな幼稚園

私は、静岡県清水市で生まれた。

家の前には田んぼがあり夏になれば蛍が飛び交っていた。ロバのパン屋さんがパンを売りに来ていた。湧き水が道や生垣などいろいろな所から湧き出ていた。目をつぶると、断片的に情景が次々に浮かんでくる。

夏にはよく台風が上陸した。台風接近の情報が入ると、早々と雨戸に板が打ち付けられた。台風が来ると何日も家に閉じ込められるということが予想され、子どもたちは、おやつを買いに行かされた。私は、動物の形の塩辛いビスケットのようなお菓子が好きで、たくさん買い込んだ。夜、停電に備えてロウソクを用意し、枕元には、おにぎりや大量のおやつが置かれていた。ロウソクの光がゆらゆら揺れて、非常時なのにワクワクしてしまふ子どもだった。



家のすぐそばまで幼稚園の通園バスが来ていて、私は、そのバスに乗って幼稚園に通った。泣き虫で母親のそばで甘えてばかりの子だったけれど、一人でバスに乗って幼稚園に行かれるくらいには独り立ちしていたようだ。

私が通っていた秋葉幼稚園は、お寺の幼稚園だった。昭和三〇年代後半は、園児がどんどん増えていった時期で、幼稚園は増設につぐ増設だった。

幼稚園は音楽に力を入れていたようで、昼食時には、クラシックの音楽が流れていた。家の食事風景と、それは大きく違っていて、「幼稚園ってすごいなあ」という印象が残っている。ピアノも保育に取り入れていた。ピアノの音は少しも覚えていないけれど、ピアノを赤ちゃんに見立てて布にくるんで抱きかかえ、お母さんごっこをしたことを覚えている。斜めに抱きかかえたピアノの重さが、赤ちゃんにびったりだった。

誕生カードは宝物

幼稚園の誕生会では、お祝いのカードをもらった。そこには、写真と自分が描いた絵、インタビューへの答えと先生のコメントが書かれていた。

「大きくなったら何になりたい？」というインタビュー



で、私は、四歳の時はお花屋さん、五歳の時は幼稚園の先生と答えていた。先生は、きれいな字でお祝いのメッセージを寄せてくれて、私は繰り返しこのカードを見るのが好きだった。

クレヨンで描いた絵の上には、薄い紙がついていてカードが汚れないようになっていた。薄い紙が上についているのが特別な感じがして、パラパラッと音のなるその紙をそつとめくると出てくる自分の絵も、何か特別な絵のように思えた。この誕生カードは、大切な宝物になっている。

困ったこと

幼稚園の頃のことを思い起こしていくと、楽しかったことより、少し困ったことや驚いたことが浮かんでくる。冒頭の鬼ごっここのシーンは驚いたことの一つ。困ったことのも思いはいくつもある。

外で遊んでいて時間が経つのを忘れて部屋に戻ったら、みんながもう集まっていてハイモニカを吹いていたことがあった。

その時、私は、裏庭のようなどころに友達と二人で入り込んで遊んでいた。どれくらいの時間が経ったのか、気が付くと、空気が違う感じになっていた。

「あれ、おかしいぞ」と周りを見回すと、さっきまでたくさんの方達でにぎわっていた

園庭に、人影がまったく無い。あわてて園舎の方に駆け戻り、そっと窓から中をのぞいたらもうみんなが集まっていた。びっくり！ という感じで友達と顔を見合わせたことを覚えている。

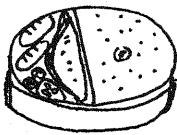
悪気は何も無くて、ただ時間が違う風に私と友達の周りには流れていたただけだった。その時、先生はどうしたのだろうか？ 叱られたという記憶が何もない。

絵の具で絵を描いている時に水をこぼしてしまったこともある。その時も、叱らずに、先生はこぼしてしまった水を一緒に拭いてくれたような気がする。やさしい先生だった。幼稚園を修了してからも、数年間年賀状のやりとりをしていた。ある年、先生の苗字が変わっていて、結婚して東京に引っ越したと書かれていた。その知らせを読みながら、母が「いい先生だったものね」「幸せね」と繰り返し言っていた。

私の中で、「やさしい先生」「結婚」「幸せ」という三つがしっかりとつながっていき、それが、その後の私の歩みに影響を与えたのかどうかは、定かではない。

塩辛い思い出

友達とのことでは、心にズキンと残っていることがある。お弁当のことだ。



幼稚園では毎日お弁当を食べた。ある日のこと、同じ机で食べていた友達の弁当に塩

鮭が入っていた。少し小さくてピンク色の塩鮭を、友達はとてもおいしそうに食べていた。「おいしそうだなあ」と思った私は、母に塩鮭をお弁当に入れてほしいとねだった。

数日後、あこがれの塩鮭入り弁当を持ち、私は意気揚々と幼稚園に行った。

いよいよ昼ごはん。弁当箱のふたを開けた時も、私はうれしくて、きつとニコニコしていたと思う。おいしく食べ始めたその時、思いもかけない一言が聞こえてきた。

「真似したでしょ！」

「え？」と言って顔をあげると、そこにはちょっと冷めた目で私を見る友達顔があった。真似をしたのはその通りなので、言い返すこともできず、私はうつむいてお弁当を食べ続けた。友達はそれ以上何も言わなかったけれど、ちよつぱりしよつぱさを増した塩鮭の味とともに「真似をすることは恥ずかしいことだ」という思いが、私の中に強く残った。

友達は、やさしくもあり、きびしくもあった。

左利きの私に対して、母も先生も無理に右手に箸を持たせようとはしなかった。ところが、親切な友達は私をそのままにしてはおかず、「だめなんだよ」「右手にすれば」と注意したり、時には「がんばって」と励ましたりしてくれた。私は、そう言われるとしかたなく右手に箸を持って食べていた。

「どうして左手で食べてはいけないの！何かおかしい！」という思いが沸き起こり、

「私は左手で食べるからいいの！」と友達に言えるようになったのは小学校の中学年になった頃だった。

甘い記憶

幼稚園の帰りの時間。私たちは先生の周りに集まった。大好きな肝油ドロップが配られる時間だった。

表面に砂糖の粒々がついているゼリー状のドロップは、甘くてとてもおいしかった。口の中に入れて、ゆっくりその粒々を味わう。噛んでしまうとあつという間に終わってしまうので、慎重な行動が必要だった。口をつぐみ、誰も一言もしゃべらず、目だけで「噛まないだよ」「ね」「おいしいね」と語り合った。

小学校の思い出というと「脱脂粉乳」になるのに比べて幼稚園の「肝油ドロップ」の思い出は甘くなつかしい。最近「肝油ドロップ」を見つけてさっそく買ってみた。口に含んだその味は、かすかに昔の面影はあるけれど、全く違うものだった。

幼稚園という場所でたくさん遊んだ後に、やさしい先生から一粒ずつ配られたドロップは、特別の味だったのかもしれない。

(東京都練馬区立光が丘さくら幼稚園)



子どもの写真に見る大人の眼(1)

—記録としての写真から—

荒川 志津代

はじめに

私たちは日常何気なく子どもの写真を撮り、見ている。プロの撮った子どもの写真に感銘を受けたりもしている。しかしそこに写された子どもとは、現実の、実際の子どものものだろうか。

写真が絵画や言語と異なる点は、それが指示する対

象と物理的なつながりを持つていることにあると言われる。絵画や言語が、存在しないものを描くことが出来るのに対し、写真は、そこにある物体を光の作用を通して、像として定着させるものだからだ。それゆえ写真は、事実という「真」を「写」すものと、思いこまれやすい節があった。

写真が記録の道具として注目されたのもそれゆえだ

ろう。地形、街の景観、建物は言うに及ばず、戦時では、戦況を記録し伝える道具としても活躍した。しかし例えば、戦争を伝える報道写真が、必ずしも、その戦いの「事実」を伝える報道とは限らないことは、今や多くの人が知ってる。心ないダイバーに傷つけられた珊瑚の写真が、「やらせ」であったという事件も、かつてあった。

物理的な作用による像が示されるということ、その像が、真実又は事実であるということの間には、どうやら距離があると思われる。写真には、撮る側の、何を撮りたいか、どう撮りたいかという思いや意志が、意識化されてはいなくとも反映されているようだ。

写真がこのようなものであるとすれば、私たちが目にする子どもの写真にも、撮影者である大人の思い、つまり子どもの何を選び取って写真として撮りたかったのか、どう撮りたかったのかという思いが、反映さ

れているだろう。それは大人の子どもの見る眼であり、子どもも観とでも言えるものだ。子どもの写真を撮ったり見たりする動機にはいろいろな要素が含まれているが、最も意識化される理由の一つは、記録しておきたいということだろう。第一回は、そんな写真から大人の眼差しを考えてみたい。

一、かわいく撮ること

子どもが私たちの気持ちを引き寄せる理由の一つは、彼らがあまりにも早く変化を遂げてしまうからかもしれない。一過性で、決して繰り返すことのないその変化を見届けておきたいと願う余裕を、平和な暮らしをしている私たちは持っている。古来戦時には、変態を遂げた後の姿におびえ、子どもをこそ亡き者にすることも行われたが、今の私たちは、移りゆく一瞬をいとおしむ幸いに恵まれている。

成長の記録として日々私的に撮る写真とは、どんな

写真だろうか。赤ん坊の時には、ミルクを飲んでいる顔、お風呂のシーン、そして「はいはい」、「たっちとあんよ」のシーン等が定番である。幼児になると、遊園地や公園での写真も多くなる。

これらの写真は、家族とりわけ親にとって、喜び、安堵、慰み、誇り、等々をもたらしていることだろう。そしてより満足できる写真を撮りたいと、撮影技術の向上をめざし、ハウツウ本を手にしたりもする。

子どもの撮り方といった本では、写真一般の技術解説もなされるが、子どもをいかに子どもらしく、かわいく撮るかという点から、構図やシャッターチャンス
の解説がされる。例えば『子どもをもっとかわいく撮る本』（彩流社）では、光の使い方、「雰囲気のある写真」にすることや、「子どもの視線がはっきりした写真」といったアドバイスがある。「遊ぶ子どもの無邪気な姿を大胆に引き出す」ために、「近くにある小道具を使ったり、正面ばかりでなく斜めにするなど



▲写真1

子どもの姿や表情を大胆に切り取る構図」の紹介もあった。私たちは光の処理一つとってもそんなにうまく撮れないけれど、よりそれらしい写真を撮りたいと願っている（写真——前頁）。

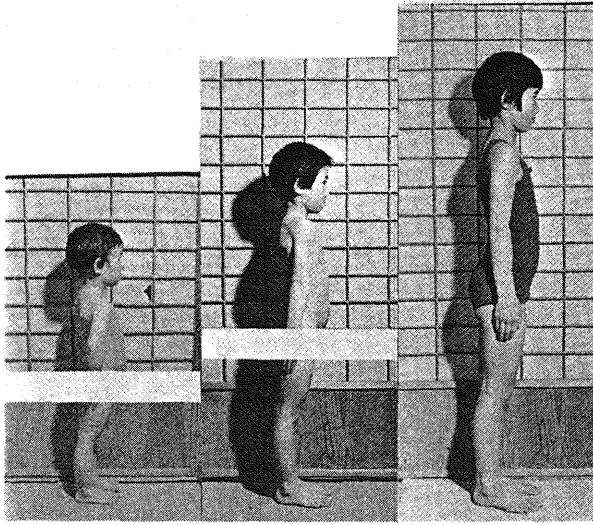
実際の子どもは、ぐずぐずと泣き募ったり、強情とも思われる程に抵抗したり、ふてくされたりといった面も見せるし、大人の側も鬼のような顔で叱りつけることもあるが、そんな場面を写真に撮りたいとは思わない。記録として残しておきたいのは、あくまでも、私たちが期待する子どもらしさであり、かわいらしさなのだ。

それゆえ写真と現実はいコールではなくなる。人に赤ん坊を見せる若い母親が、「ほらかわいいでしょう。写真の方もとつかわいいのに、写真が見せられなくて残念だわ」と言ったというエピソードが、リアリティを持ち、またその内容が簡単に批判出来るものではないのは、そのためである。生の現実と、写真という

イメージと、簡単にどちらが実体とも言えない。思いや観念もまた、人を動かす強力な実体だからだ。

二、分析的に撮ること

記録ということを意識的に考えた時には、子どもの目線とか雰囲気とかでなく、事態をより精密に把握しようとする写真を撮ることがある。例えば量りの上の生まれたての赤ん坊を撮るにも、顔に焦点を合わせるのではなく、量りの目盛りが読めるように撮影したりする場合である。赤ん坊の成長を一定期間ごとに撮影して、その特徴を記したりすることも、すでに一九三〇年代に見られていた。そして戦後、例えば岩波写真文庫『赤ちゃん』（一九五二）では、月齢別の成長の写真が「1年間のアルバム」というタイトルのもとに配置されている。戦後の写真の大衆化の流れの中で、子どもの写真の撮り方に対する一つのあり方を示すことになったと思われる。



▲写真2 富岡畦草 1961、'65、'70 シリーズ日本カメラ62
「子供の写し方」(1984、日本カメラ社)より

このような分析的な子どもへの眼差しの一つの典型は、定点撮影であろう。一月ごととか一年ごとといった具合に、一定の時間の後に、同じ場所、同じ構図で

撮影する方法である(写真2)。そもそもは昭和の初期に、日本の写真家がアメリカの営業写真師の写真を見たことに始まるらしい²⁾。それは自分の娘の成長のさまを、グラフを描いた同じ背景の前にたたせ同じ距離から同じカメラで撮影したものであった。しかし日本でこの方法が注目されるようになったのは、昭和三〇年頃であるようだ³⁾。この時期は、戦後の「民主的・科学的」子ども観のもと、専門家以外の一般の人々にまで知能テストが知れ渡っていった時期である。子ども像の捉え方も、測ることに魅力を感じていた児童研究の動向や、そういった時代の空気と、無縁ではなかったのかもしれない。

最近の写真展等で見る子どもの定点撮影写真は、かつてのものとは異なり、計測による記録というより、この手法による新たな「表現」という印象を受ける。例えば、一地点で撮った数年ごと数枚の写真を一枚の写真の中に取り込み、独特のおもしろさと情緒をかも

しだすアイデア作品などである。今、感性の時代となって、定点撮影もあまりに機械的なものは流行らなくなったようだ。どのような子ども像を撮りたいかという個人的思いの中にも、それぞれの時代の子どもの感じ方や捉え方が、反映されているように見える。

三、節目を撮ること

それにしても子どもの記録といえ、やはり行事であり、イベントといったハレの場である。宮参り、七五三、入園、入学などは、何としても残したい写真だ。

一九五〇年代後半我が家は、小さな村で裕福とはとてもいえない生活をしてきた。カメラも無かったが、子どもの成長に伴う行事の折には、親類か近所の誰かが時折撮影に来た。小学校入学記念の撮影で私は、地域の慣習であったセーラー服ではなく、母の好みの服を着ている（写真3）。左手に持っている上履きを入



▲写真3

れる円筒形の手提げは、その地域の皆がもつ平凡な上履き入れを嫌った母が、デパートで探してきたものだ。撮影場所は、我が家の向かいにあった医院を経営する医師の家の庭、車はもちろんその家のもののである。この設定で、母が望んだ通り「垢抜けた」「それなりの」小学生に見えただろうか。

記念写真とは、我が家ばかりでなく多くの場合、望む形のイメージに近くなるよう創作されたものだろ

う。写真館で重厚な椅子などの小道具を使って撮る定式化された記念写真は、まさに演出によって、理想像として創り出された写真と言える。そのような記念写真の像は、社会的にひとかどな人物、暮らし、家族であることを示しているようだ。記念写真には、子どもがやつとそれなりの地点まで成長を遂げたという生き死にのレベルにおける安堵とともに、社会的にまっとうな育ちをしており、社会の中でそれなりの位置を得ているという思いが、写し込まれているように見える。それは、成長の節々における行事が持っていた、元来の機能の一部ではある。

私たちは、写真という像によって、過ぎゆく時間を記録し、記憶しようとしている。何故にか？ スーザン・ソントグは、次のように言っている。「ひとは現実を所有することは出来ない。ひとは映像を所有する。」「ひとは現在を所有することは出来ないが、過去を所有することは出来る。」「(写真は)記憶の道具とい

うよりむしろ記憶の発明であり、その置き換えなのである。」⁴¹⁾ 私たちは子どもの姿を記録として写真に撮ることによって、その人間の過去を所有しようとしているのだろうか。
(名古屋女子大学)

引用文献

- 1) 多木浩二『写真の誘惑』(岩波書店、一九九〇)、三一頁。
- 2) 景山智洋『芋っ子ヨッチャンの一生』出版にあたり、景山光洋『芋っ子ヨッチャンの一生』(新潮社、一九九五)所収。

3) 富岡畦草が、この技法紹介のため、この名称を思いついた時期である。

上野千鶴子『家族の記録』、三木淳他監修『写真大事典』(講談社、一九八四)五二三頁。

4) スーザン・ソントグ(近藤耕人訳)『写真論』(晶文社、一九七九)、一六六頁。

幼児教育の独自性はどこにあるのか(3)

矢野 智司

子どもが動物を好きな理由

前回は動物絵本を通して、なぜ子どもが動物になるのかについて述べました。子どもは動物になることで、世界へと溶けて全面的なかかわりを実現することを明らかにしました。今回は前回の続きです。イヌやネコやウサギやハムスターといった身の回りにいる動物はもとより、ゾウやキリンやライオンといった動物園でしか見ることで

ない動物まで、子どもは動物が大好きです。それはなぜでしょうか。なぜ子どもが動物に心を惹かれるのかについて考えてみたいと思います。

大人から見れば、子ども自体が動物にきわめて近い存在といえるでしょう。子どもは道をジグザグに歩いたり、急に飛び跳ねたり、大きな声を出したりします。それは子どもという生の在り方

が、大人のような役に立つか立たないのかといった功利性や、あるいは自分を他人からの悪意から守ろうとする防衛への関心がなく、端的に他の人々や世界のさまざまな出来事に開かれているからです。ですから、歩道の石畳があれば一個飛ばしでスキップをしますし、何か見慣れないものがあれば声をあげます。このような子どもの関心の開かれ方は「好奇心」と呼ばれたりします。

子どもは役に立つかどうかなどにかかわらず、世界のあらゆる事柄に関心を示します。大人の関心が主に功利的であるのに対して、子どものこのような関心のあり方は純粹な関心と呼ぶこともできるでしょう。そのため子どもは、大人にとってはなんの役にも立たない「がらくた」に、異様な興味を持つたりします。子どもは道ばたでいろいろなものを見つけ、ポケットのなかに入れたりします。丸っこい石ころや色ガラスの破片や

木の実、あるいは甲虫の死骸などがそうです（これらはかつて私のポケットに入っていたものの簡単なリストです）。それは子どもには知らないことが多いからではありません。私たちも知らないことはたくさんありますが、そんなことにはいち関心を払ったりしません。それというのも大人は自分に関係のないことは無視することができるところです。しかし、子どもの心は三六〇度全領域に渡って開かれています。ただ全領域に開かれているだけではありません。深く開かれています。

そのことをもつともよく示しているのは、子どもがしばしば驚嘆することです。子どもはよく「おお！」と声をあげて驚嘆します。これはとても優れた能力です。そして動物はそのような子どもを驚嘆を最高度まで高めてくれるものです。跳ねるもの、飛ぶもの、泳ぐもの、これらの動物を

見ては子どもは驚嘆の声をあげます。その声があった瞬間に子どもはそのものと一つになっています。対象化したり、分節化したりできないからこそ、言葉にならない言葉「おお！」を発するのです。こうして声とともに子どもは自ら跳ねるものとなり、飛ぶものとなり、泳ぐものとなります。そしてその驚嘆は、子どもに哲学することを誘発します。驚嘆が哲学の母であるのは何も古代ギリシヤの哲学者にかぎりません。

まど・みちおは「ぞうさん」の詩で有名な詩人ですが、彼は子どもの驚きに大変敏感な人でした。そのためもあつてか、まどさんは動物についての子どもの哲学の詩をたくさん書いています。「ぞうさん」の鼻の長さへの驚きと親子関係への共感をよく知られているので、ここでは「うさぎ」を見てみましょう。

うさぎ

まど・みちお

うさぎに うまれて

うれしい うさぎ

はねても

はねても

はねても

はねても

うさぎで なくなりやしない

うさぎに うまれて

うれしい うさぎ

とんでも

とんでも

とんでも

とんでも

くさはら なくなりやしない

この詩が優れているのは、もちろん「はねてもはねても はねても はねても」と「はねても」が四度繰り返されているところですし、「とんでも とんでも とんでも」と、やはり「とんでも」が四度も繰り返されているところです。跳ねるといふ動作は一度で終わることなどなく、何度も何度も繰り返される動作です。うさぎが跳ねるのも繰り返して跳ねることですから、その様は昔から「びよんびよん跳ねる」と表現されてきたでしょう。このように何度も「はねても」「とんでも」といふ言葉を繰り返すことによつて、この詩を歌う子どもを実際のうさぎの跳ねることへと誘っていきます。この詩を歌う子どもは、跳ねずにはおられません。この詩は跳ねる反復の驚きと喜びをうまく表現しています。それでいいこの詩は子どもの哲学でもあります。

子どもは動物を前にして哲学を実践している

す。哲学といえは難しく考えるかもしれませんが、この世界は不思議に満ちていますので、子どもの頭のなかは日々謎でいっぱいです。そのなかでも最大の問いは、自分とは何者かという問いです。もちろん子どもは「人間」とか「自己」といった概念を使つて哲学したりはしません。もっと具体的なイメージを使用して哲学するのです。動物はそのような子どもの哲学の問いを生みだすとともに答えをもあたえます。

古代に人間が思考を始めて以来、多様な動物の姿や生態は、人間にこの世界を理解するための鮮やかでシンプルなイメージを提供し続けてきました。神話はそのような動物のイメージを通して世界を理解しようとする試みで一杯です。ちょうど古代人がそうであったように、子どももまた自分は何者かという問いが、動物という他者の存在を通して初めて開かれます。同様にその答えも動物

をまえにして明らかになります。二本足で歩く、言葉を話すなどといった人間と動物の違いもそうですが、それよりも重要なのは動物とつながるという生命の原型的なイメージです。動物を飼うことは動物についての認識が自然に深まりますが、このような効能は動物とともにいることの幸福感からみれば二次的です。子どもは端的に動物となり動物と生きること、この驚嘆から生命の哲学へと導かれることが重要なのです。

さて、このように子どもが動物とともに生きることが偶然のことではなく、内的な深いつながりがあるとすれば、大人になるとはこのような動物との内的なつながりを作りかえることを意味しています。子ども時代からの別れを作家たちはいろいろな形で描いてきましたが、動物との内的なつながりからの別れを描いた作品もたくさんあります。子どもの愛する動物との別れを描いたもの

は、たいてい子どもの成長物語として描かれています。

このような動物との友情や交感の悲劇的な結末を描いた優れた作品にローリングスの『子鹿物語』



(偕成社)があります。この物語は、春に自然のなかで喜びに溢れて遊ぶ少年が子鹿と出会うところから始まり、一年後にその子鹿を殺害することで終わります。子どものもつ自然(動物性)との一体感が失われる姿を描いたものです。ほかにこのような動物殺害と子どもから大人への成長とを描いたものに、ペックの『豚の死なない日』(白水社)、最近ではマンガレリの『おわりの雪』(白水社)などがあります。この三つの作品に登場する父親はいずれも病んでおり、主人公の少年は大人になることが強いられ、そのために動物(動物

性¹¹子どもの生命感¹²の殺害が起きるのです。

こうした作品は暴力的な結末をむかえ悲劇的なものです。多くの場合は、このような動物殺害は起こりませんし、以前のようなつながりをもつことができなくなりますが、大人になつたからといって動物が嫌いになるわけではありません。しかし、ここには子どもが大人になるときに切断があるという真理も語っています（大人は別のかたちで生命感を求めることになります）。ただこれは幼児教育が直面する課題ではありません。でもそのことを知っておくのは大切なことです。

幼児教育の話に戻りましょう。動物性は生命とつながり「野性」とつながりますから、それはまた「野蛮」ともつながっています。躰やマナーの習得はそのような「野蛮」を「文明化」することです。ですから躰やマナーの習得は人間化にとつて大切なことです。なにより教育はこの動物状態

を克服するものとして発展してきました。ここでも私たちは一方で人間になることと、もう一方で生命でつながりをもち深めることの二重性に直面します。これはこの連載の一回目から繰り返し返しているテーマです。

しかし、このような二重性は今に始まったことではありません。幼稚園が誕生したときからそうです。幼稚園の創始者フレーベルの思想はこの二重の課題の統一を目指してきました。フレーベルは有名ですし、なによりこの『幼児の教育』はフレーベル館から出版されています。彼の著作が読まれることはあまりありませんが、彼の思想は現在においてもとても優れたところをもっています。次回はフレーベルの話をししましょう。

（京都大学）

『新しい時代に生きる子どもをどう育てるか』

—教育における発想の転換— (4)

〈本田和子先生講演—前号よりの続き〉

◇司会者から

先ほどの本田先生のお話の最後のところで、「大人と子どもの関係が変わってしまった。つながり方が変わっ

て、質が変わってきた」というお話がございました。

堀合先生も、「これから、どうやって子どもたちとしっかりとつながっていくかが、保育の場で求められてくる」と示唆されました。皆さん、これからの新しい時代をどうイメージするかは様々だと思いますが、

今、何が我々子どもに関わる人たちの課題になっているのか、先生のお考えをお聞かせいただければと思います。

『自己肯定感』を育むこと

子どもは、つながっていく人を求めているのではないかと、私もそう思います。これから保育に限らず、子どもと大人が共に生きる時に一番必要なことは、子どもが「自分の存在を肯定できるようにしてあげる」ところではないでしょうか。つまり、先ほど申し上げましたように、子どもたちは、もしかしたら「子ども嫌い」に向かうかもしれない社会の中に、気の毒なことに生まれてしまう。それから、大人と子どもの関係がバラバラになっている。昔のように自然につながっているという形ではない生活形態の中に置かれてしまふ。そうすると、「自分はこの世にいていいかしら」、つまり変な言い方でございますけれども、「自分はこ

の世界にとって必要な存在なんだ、いてもよい存在なのだ」という、『自己肯定感』が非常に育ちにくいのではないかと思います。

前にこれも酒鬼薔薇事件でしたか、子どもが子どもを殺すという事件があった時に、小学校の先生が、「貴方の命が大切なように他の人の命も大切なよ」という指導をしたら、「僕の命なんか大切じゃないもん」と、子どもが言って大変ショックを受けたというお話を聞いたことがあります。私も、「確かにそうだろうな」という気がいたします。つまり、自分がこの世界に存在することの意義がちよつと確認できない。意義って子どもですから言葉で確認しなくたっていいのです。感覚として、自分の中に「自分はこの世界に生まれてきて、この世界に存在していることに意味があるのだ」というような感じが持てないままに成長していつている。これは非常に不幸なことだし、言葉を尽くして命の大切さや生きる喜びを教えてみて

も、なかなか難しいだろう、と思ったことがございます。

「他人から受け入れられる」経験を通して「自分を受け入れ、他人を受け入れる」ことができる

こういうことって、一番最初に本当に人生の最初の数年間で培われるものだと思います。「自己肯定感」、自分がこの世界に存在することに意味があるのだと感じるのは、「他人から受け入れてもらえるということ」を通してだろうと思います。例えば赤ちゃんが泣くと母親がとんできます（あつ、母親は今の時代、とんでないかもしれません。笑）。とんできたといたします。とんできたら子どもは、自分がこの世にいてもいいってことが分かるのです。自分がサインを出せば、誰かがきてくれるわけですからね。それは自分の存在の肯定になるわけです。自分で自分がこの世に存在してもいいというような肯定感が生まれて、それが少

しずつ育っていく。そうすると「この世に存在しているもいい自分を、存在させてくれる他者がいる」ということに気がつく。「自分を受け入れること」と「他者を受け入れること」ができてようになっていくわけですね。

自分が空っぽなのに、「他人を受け入れなさい、他人と仲良くしなさい、他人の命を尊重なさい」と言っても、それはたぶん言葉だけ、頭だけのことになるであらうと思います。本当にその、先ほど堀合先生は、『心』を『心』で『心』へとか、いろいろ禅問答みたいなことをおっしゃるので難しいのですけれども、心底から自分が存在していてもいいということに気づき、自分を存在させてくれる他者、例えば、さつき、泣いた時とんできてくれる母親でも保育者でも誰でもいいんですけれど、そういう人の存在に気づき、そして「自分が生きているということは、他者に支えられている」ということに気づくということの中で、他者を

尊重するということも育っていくはず』でございますから、本当に『子どもを受け入れる』ということが基本になるのだと思うます。

双子の男の子のエピソードから

今日は折角の機会でございますから、私が大好きなエピソードを一つ申し上げまして、終わりにしたいと思います。これからの子どもたちは、これからの子どもたちに限りませんわね、これからを生きる人間は全てといった方がよろしいかもしれませんが、『異質の他者、自分とは異なった人と共に存在する機会を多く用意すること』は極めて大切であろうと思っております。

そこで最近ちょっとお得意のエピソード、あちらこちらでご紹介申し上げているのですが、一組の双子の男のお子さんをご紹介申し上げます。小学校の今三年生になります、一人の坊やが極めて普通の子ども

で、もう一人は重度の障がいをもって生まれてきました。したがって、車いすの生活をしていて、それもかなり重度で、話すこともできないし、お箸やスプーンを持って食事を口に運ぶこともできない。全て人手を介して、かろうじて生きているという子どもです。この二人、それでも喧嘩したり、健康な方の男の子は時々歯がゆくなつて兄弟をいじめたり、つつついたりするわけですけれども、そういうことをしながらも、もつれ合うようにして仲良く成長して、片方は小学校に入ったわけですね。

ある時、小学校に入った、健康な男の子、仮にK君としておきましょうか。K君が学校から帰ってきた。先生がメモを渡して、お母さまに渡しなさいとお手紙を預けてくださった。お母さまがご覧になったら、「今日K君は学校で大泣きに泣きました。どうしてこんなに泣いたのか分か



りません。理由を聞いても答えません。普段からそんなに泣く子どもではないのでちよつと気になりました。」というお手紙だったようです。お母さまはK君の様子を見ていたのですが、いつもと変わりなくS君の車いすのそばに行つて、ちよつかいを出したり、話しかけたり、話しかけても何も答えないのですけれども、一緒にテレビを見たりしている。だから、なにも聞かない方がいいのかなと思つてそのまましておおきになった。夕飯が終つて、お母さまがお台所で後片づけをしていらしたら、側に寄つてきて何となく物言いたげな風情だったから、「どうしたの」つて聞いたら、急に涙が一杯たまつた。これは聞かなかつた方がよかつたかなと思つて放つておいた。

「役に立たない人が、

生きていていけないことはないよね」

そして、しばらくは、そんな状態で二週間くらい経

過したのでしようか。お母さまも学校の先生もぼつりぼつりと引き出して、結果としてまとめて、こういうことが起こつたんだということが分かつた。というのは、ある男の子が日曜日にお父さまと一緒に競馬のテレビ中継を見た。お父さまは競馬がお好きだったらしくて、いろいろ説明をしてあげた。「あの馬は一番後ろから走つてくるけれど、一番強い馬だから見てご覧、きっと物凄いスピードで追い抜いてトップでゴールへ駆け込むよ」と。そしたらその馬は本当にそういう、大変強い馬だったようで、そうやってトップに駆け込んだ。それで、お父さまは「ほら、ご覧」ということを言つた。初めて競馬なるものに触れたその男の子は大変感心して、「すごいんだね、馬つてみんなあんなにすごいのか？」と聞いたら、「そうじゃない。あの馬たちは、走るために生まれてきて、走るために訓練されているのだ。だから、走ることができなくなつたら、時として殺されてしまうことがあるのだ」と、お父

さまは何気なくそういうことを教えなすったのです。

そのお子さんも、大変新しい情報に触れたわけですから、大変喜んで次の日、お友だちに言いふらしたのですね。「競馬見たことある？ 競馬つてすごいのだよ」というわけでお話をした。そして、「ものすごく（速く）走る馬なのだけれど、もしかして、骨が折れたりなんかして、走れなくなったら殺されちゃうんだって。役に立たないものはいちゃいけないのだから」と、そういうことを言った。そしたらK君は突然泣き出したってわけなのです。

そういうことがやつと分かって、先生からお知らせをいただいた、K君が「うーん」なんて言いながら、「でもね、役に立たないことが生きていていけないことはないよね。役に立たなくなったら、殺しちゃうなんておかしいよね。役に立たない人が生きていていけないなんてあると思う？」なんてことを、繰り返し、繰り返し、執拗に主張した。お母さまはしみじみ、

「これはたぶん、十年くらい何もすることができない兄弟、障がいをもった兄弟と一緒に暮らしてきた一つの成果ではないかと思った」とおっしゃるのです。

「他人の生命を犠牲にして生きる重荷」を子どもには背負わせたくないという両親の思い

そして、私もそのお話を聞きながら思い出したのは、その方が赤ちゃんをお産みになる前のことなのです。その方というのは、実は私が通う美容院のママさんのお嬢さんなんです。美容院のママさんを通していろんなことをうかがっていたのですが、ママ



さんが、「うちの娘ね、初めて子どもができたのだけれども、出生前診断で見たら双子なのですよ。それはいいのだけれど、片方は重度の障がいをもって出てきて一生障がい者として過ごすに相違ないとお医者様に言われた。お医者様はそれとなく、『どうされますか』と聞かれた」と言うのです。つまり、若い経済的にもそれほど豊かではないサラリーマン夫妻が双子を育てるだけでも大変だ。しかも、片方がとっても重度の障がいをもっていたら、どんなにか大変だろう。今だったら中絶できるといふ示唆だったのではないかと思う。若い母親になろうとしている女性は大変悩んで、実家のお母さまのところ相談にいらしたのでですね。実家のお母さま、美容院のママさんですけども、「私は何も言っておけることは出来ない。夫婦で良く相談してお決めなさい。どちらを選んでも私は貴方を支持します」ということを言われたそうです。

しばらくしたら、その方が「先生、うちの娘、二人

とも産むそうです」、とおっしゃったんです。私はちよつとびびくりいたしました。「まあ、良くその決心をなすったわね」と言いましたら、「そうなんですよ。私もね、『どうして決心したの?』と聞いたら、『さんざん考えた末に、もし、二人とも産んで二人とも育てるとしたら、私たちは経済的にもさほど豊かではないから、障がいをもった子どもの世話に明け暮れて、片方の子どもの世話は、もしかしたら少し疎かになるかもしれない。それから、片方の子どもに、十分なことをしてやれないかもしれない。よそのお子さんのように、いい学校に入れたり、いい塾に通わせたりということもしてやれないかもしれない。だから、一人の方が豊かに育てられると思った。

しかし、成人したあかつきに、その子が、自分の今の幸せは一人の兄弟の命を犠牲にして獲得されたものなのだとすることに気づいて、一生の重荷にするということがもし起こったら、私たちは勝手にその子にこ

んな重荷を負わせる権利を持っているのだろうか、そういうことに思っていた。もう運命なのだから、二人とも産んで、とにかく二人を一生懸命育てましようという結論に到達した」。

私は、その話をうかがって本当にびっくりいたしまして、というのは、その美容院ですとお世話になっていたものですから、その方が少女の時代から成長なさるところを存じあげていたのです。そのお嬢さん、どちらかというところ、自分を通そうとする余り、時として周囲と衝突し親御さんを困らせることがあった。その方が、いいお相手が見つかって結婚されたというので、よかったですね、と言っていたら、その人が母親になるうとして、そういうことに巡り合って決断をされたらというので、正直言って大変びっくりいたしました。

異質の他者と共に生きることの意味

そして、やっぱり人は母親になろうとする時、しか

も非常に大きな課題を与えられた時に、急速に成長するものなのだなあ、という思いを強くさせられた例だったのです。

その坊やが、「役に立たない人は、生きていちゃいけないことはないよね、誰だって生きていていいんだよね」と、しきりにそう言った。私はそれを聞いて、「本当にああ、二人お産みになってよかったわね」という気持ちになりました。

その若い母親も実家に帰ってきてしみじみして言われたそうです。「二人産んでよかった、産んでよかったと思う」と。「Kは苦勞しながら成長して、これからも苦勞して成長していくだろうけれども、かけがないものを身につけたのだ」、そういうことを言われたそうです。

そのK君というのは、最初から変な兄弟が傍にいたということになります。自分と同じよう



に動くこともできないし、話すこともできない。そして両親の世話は一方的にその子に注がれる、そういう子どもと一緒に成長しはじめたわけですから、たぶん、その異質の他者、兄弟でありながらもまったく違う他者との共存に、おそらく心の中では葛藤があったり苦労したりしたのだと思うけれども、そのプロセスの中で、人間として一番大切なものを獲得したのかもされない。

つまり、「生命というのは何ではかることもできない大切なものだ」ということを、この効率主義一辺倒の、役立つことだけが重視されるような社会で、彼はそれを獲得してしまったのだ。私はこの時本当に、異質の他者と共に育つということの意味を改めて感じさせられました。こんな時代だからこそ、効率ということが非常に重視され、合理的に効率的な結果を上げることができるような道だけがよしとされるようなこんな時代だから、逆に効率性を追求しにくい異質な人た

ちと、共に存在しあうこと、これが大切ではないか。

例えば、言葉も通じない、宗教も文化も習慣も違う社会の人たちと、私たちが心を開いて共に生きること、それから子どもたちにもそのような機会を用意する。それが、子ども嫌いが進行するかもしれない、そして子どもが成長しにくい世界の中で子どもたちが成長していくために、極めて大切なことではないかと考えます。とにかく、このエピソードを最後にお話したかったので、お時間を頂戴したことを大変嬉しく思っております。ありがとうございました。

(報告者 首藤美香子)

☆この連載は今回で終わります。

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(5)

しょうごもり
庄籠 道子

「謎が解けた」の巻

用務員の田原のおばちゃんと籠先生が話をしている。三人組はこっそり聞いた。おばちゃんの勤務時間には二時四十五分までらしい。ちようど三時ごろ幼稚園を出るらしい。幼稚園を出て、道路の向こうの駐車場まで歩く。

「私が帰る時、いつつもラジオのおっちゃんに会うんよ」
と、田原のおばちゃんと言う。
「会うのはええんやけど、きのうね、駐車場から車を出そうとしたら、おっちゃんが『オーライ、オー

「ライ」っていうふうには、道で手招きしてくれるの。私、信じてバックしてええんやろかって迷ってた」

田原のおばちゃんの話聞いて、籠先生の目がきらりと光り、

「いつも帰る時に会うんやね？ 三時ごろに会うんやね」

と念を押した。籠先生のやつ、なにかたくらんでるぞ。三人組は、気になったが、帰る時間になってしまった。

よく朝、

「園長先生、わかりました！ やっぱりラジオでした」

と、籠先生が竹田園長先生にきっぱりと言っているのを三人組は聞いた。何の話かわからずびっくりしている竹田園長先生を前に籠先生は得意そうに説明

した。

「私、帰って、新聞のラジオ番組欄を見たんです。それで、わかったんです。」

おっちゃんは、NHK第二放送がラジオ体操をする時間に幼稚園に来るんです。朝八時半・十二時・三時です。その時間に、大きな音でラジオ体操を聞きながら歩いてくる。だから、いつもおっちゃんのラジオからはラジオ体操が流れている。

その他の時間にも、おっちゃんは幼稚園に来るけれど、その時はラジオの音は小さいか消していて聞こえない。

いつもラジオ体操が流れている局なんかないから、カセットデッキではないかと、私は疑っておりましたが、ラジオのおっちゃんを持っているのは、やはりラジオでありました！」

どうだ。まいったか。籠先生は腰に手を当て、胸を張って高らかに宣言した。へえ、なるほど。だけ

ど、そんなおおげさなことかいな。ラジオを持って
なきや、誰もラジオのおっちゃんって言わないって
ば。竹田園長先生は「ふーん」と言つてにが笑いし
た。

その日の午後、

「先生、たつやくんが竹馬、乗れたで！」

りようたが大声で呼んだ。

「え？ すごい！ どれどれ」

竹田園長先生も籠先生も田原のおばちゃんも、ま
わりの子どもたちも、みんなぞろぞろ走つていっ
た。

先月、老人会のおじいちゃんたちが幼稚園に来
て、十八人全員に竹馬を作ってくれた。

りようたとかずはそれから毎日練習して、一週間
もしないで乗れるようになった。「竹馬名人認定証」
というメダルをもらった。

先週、もくもくと練習していたなみかが乗れるよ
うになった。メダルの授賞式があった。

一輪車に乗れるようになったあいこは「一輪車名
人認定証」のメダルをもらった。

きょうは、たつやだ。

「乗ってみて」

竹田園長先生の声に、たつやがにこにこしながら
竹馬に乗って歩いた。やった。鉄棒のはしの白線か
ら、鉄棒のあっちの白線まで行けた。

「合格！」

「やったー！」

その日の午後、たつやととしなりがけんかをし
た。

みんなでかくれんぼをし
ていた。うさぎ小屋のかけ
にかくれていたたつやが



「まあだだよ」

と言いながら、うさぎ小屋のかけから出て体育倉庫の裏にかくれようとした。

おにのとしなりが

「もういいかい」

と言って顔をあげて

「たつやくん、みーつけた！」

と言った。

「『まあだだよ』て言うたやんか」

とたつやは怒った。

「聞こえんような小さな声で言うのが悪い。たつや

くんが おにやで」

と、としなりは当然だろうというような口調で言った。

たつやは頭に来た。それで言った。

「竹馬にも乗れんくせに、えらそーにすんなよ」

としなりは返事ができなかった。

その週の金曜

日、お迎えの時に

としなりのおじい

ちゃんが先生に言った。

「二日休みやから、竹馬、家に持って帰って帰って練習し

てええんやろか？ どうもとしなり、元気がのうて

なあ」

「はい、どうぞ、持って帰って帰って練習してください」

月曜日、としなりは朝来るなり

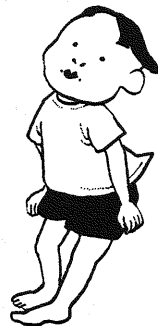
「先生、竹馬の試験して」

と、言った。ばつちり乗れるようになっていた。

「おうちでがんばって練習したのね。すごいね」

竹田園長先生にほめてもらったが、としなりはど

うってことないって顔をしていた。



そして、次の月曜日、としなりは、そ知らぬ顔をして一輪車に乗っている。

「あれ、としなりくん、一輪車乗れるようになったん？」

「うん」

「すごい。幼稚園では一度も練習してへんかったねえ。家で練習したん？」

「べつに……」

「一輪車、乗れるようになったの、男の子では一番だね」

としなりは、「一輪車名人認定証」のメダルの受賞式の時もあたりまえという顔をしていた。

「としなりくん、すごいなあ」

りょうたとたつやが言っても、としなりはやつぱり「べつに」

としか言わなかった。でも、たつやは聞いてしまった。籠先生がこっそりとしなりのおじいちゃんに尋

ねていたのを。

「としなりくん、竹馬も一輪車もあつという間に乗れるようになってすごいですねえ。やつぱり家で練習はつたんですか？」

「そりゃあ、もう。どんなもんやったか。必死でしたわ。よっぽどくやしかったんでしょな」

三日後だっただろうか。自転車の順番で三人組がもめた。りょうたが先に大きい自転車のところに行つたのにとしなりは自分が先だと言い張つた。たつやが

「りょうちゃんが先やったで」

と言うと、としなりは言つた。

「なんやねん、一輪車にも乗れんくせして！」

たつやは黙るしかなかった。

(保育研究グループ はるにれ)

特集 〈緑蔭図書紹介〉

他者との関係が、

ことばを生み、「私」をつくる

浜田寿美男『「私」とは何か』（講談社選書メチエ）

村松 賢一

ことばの対話性

ことばとコミュニケーションに関心をもつ者として、「ことばの力が人々の生活世界を成形するうえでどのような働きをなすのか」を正面から論じた本書は、ああ、もっと早く出会っていればと

思わせる内容に満ち満ちています。私が、ことばとコミュニケーションに意識的に向き合うようになったのはアナウンサーという職業に就いてからですから、もう四〇年になります。その間、暗中模索、試行錯誤を繰り返してようやく「こういうことではないのか」とつかみかけた見方が、本書

を開くと、さらに徹底的に考え抜かれていたので、一口で言うとは、それは、「ことばそのものもつ第一次的、本質的な対話性」ということになるでしょう。「このことは、人間のことばというものを考えるうえで非常に基本的なことだと思っただが、言語学や国語学の間では案外これが見落とされてきた」。私がいま関わっている国語教育の世界でも、この点は長いこと見過ごされてきました。ことばの力というものを、それぞれの個人の中に育まれる閉じた力と見て、他者との関係の中で育つ開かれた力ととらえる観点が不足していたように思うのです。たとえば、「ことばの力」という場合、「筋道を立て、きちんと話す」という自己完結的なとらえ方になりやすく、「他者との関係性の中で自分の思いを表現する」という関係的な視点をなかなかとれないのです。ですから、「誤解をさせて、訂正していく話」がすぐれ

た話だ（佐伯胖）とは考えにくく、ついで、「誤解をさせない」話ですぐれた話だと思いがちです。それぞれが、「はっきりまとまった考えを言い合おうのが話し合いだ」という転倒した見方に支配され、「はっきりしないから話し合って考えをまとめろのだ」という見方に立てないのです。これは、これからの「話す・聞く」教育の行く末を左右する重要な観点だと思えます。

ことばの本質的対話性

ここまで、つまり、ことばの対話性ということろまでは、私もたどり着いていたのですが、本書で目を開かされたのは、その前にある「第一次的、本質的」ということばです。これは、そもそも私たちがことばを獲得する過程からして、という意味だったのです。

私は、人は、ことばを獲得してからはじめて他

者との対話が可能になるのだと思っていました
が、ちがう、他者との関係が先にあって、そこか
らことばが生まれてくるのだ、と著者は言うので
す。たとえば、幼児が母親といっしょに犬を見
て、ワンワンということばを覚える場面を考えて
みましょう。犬とワンワンが子どもの中で結
びつくまでの過程を心理学的にたどってみると、
まず、「ワンワン可愛いね」という母親の声が
子どもに聞き取られるためには、子どもも、雑然
とした音の渦の中から、母親の声を取り出さなく
てはならない。これで、ワンワンというへこと
ばが共有されたことになりませんが、それが犬を
意味するのだとわかるためには、今度は、子ども
が、母親の眼差しや指さしの助けを得て、犬を風
景から立ち上げることが必要です。こうして犬と
いうへ対象が共有されたとき、はじめてへワン
ワン＝犬」という記号的関係が子どもの中に成立

するのです。「つ
まり、へ意味する
もの」とへ意味さ
れるもの」とが結
びつくうえで、ま
ずその土台になる



のが、「自分―相手」の縦の軸である」というこ
とになります。これは言語習得期に限られたこと
ではありません。およそ、人がことばを介して他
者と理解を成り立たせるためには、こうした関係
性の成立が前提となるということなのです。

私の拙い説明では、わかったようなわからない
ような気持になられたかと思いますが、著者は、
母親の見ている犬を一緒に見るといふ、あたりま
えと思っていることができないとどうなるかを、
豊富な臨床例を引いて、「声を共有する」、「一緒
に見る」という関係的行為がことばの習得にとつ

てもつ抜き差しならない意味を実にわかりやすく丁寧に解き明かしてくれます。

身体の個別性と共同性

本書で、もう一つのキーワードになっているのが「身体」です。人間は、皮膚で他と隔てられていて、その意味では個別的な存在です。個別的というのはつきつめれば、他人のことはわからないということになります。それでいながら、その身体は、〈女―男〉の關係に象徴されるように、「それ自体で完結しない」という意味で共同的だといえます。著者はこの共同性を、赤ちゃんの微笑み返しから、あくびが他人にうつる例までさまざまエピソードをまじえて説明し、身体そのものから最初から備わった本源的なものを見ます。つまり、人間とは、個別的にして共同的这个自己矛盾を生きるしかない存在なのです。

コミュニケーションというものを考えるとき、このような認識はとても重要です。私たちは完全に通じ合うことができないからこそ、少しでも理解しようとはばを尽くすことが大切なのです。

わかり合っていると高をくくってことばを惜しむと必ずしつべ返しがきます。でも悲観的になる必要もないのです。なにしろ、私たちは、私はあなたによつて私になり、あなたは私によつてあなたになるという相補的な關係の中で大きく重なり合つて存在しているのですから。

人はこうした相互依存と、ことばによる協働を通じて、他者との關係を幾重にも織りなしながら自己を創っていくのです。

（前お茶の水女子大学教授、現スピーチ
コミュニケーション教育研究所主宰）

神谷美恵子さんとの出会い

岡田 誠治

多感な学生時代におけるいろいろな出会いや体験は、その後の自分の生き方に大きな影響を与えます。自分自身を振り返ってみても、これまでに何度かあった人生や職業選択の岐路において、学生時代に得た体験・師や友人は、大きな示唆を与えてくれました。神谷美恵子さんは、私が大学に入った年に亡くなってしまった人で、実際にお会いしたわけではないのですが、その著書を通して出会い今でも私に最も大きな影響を与えている方の一人です。

私は、大きな夢と期待を抱いて医学部に入ったはずだったので、大学に入ったとたん身近な目標を失ってしまったためか、日々の授業は退屈に感じ、部活動と家庭教師のアルバイト以外はだらだらと怠惰に過ごしていました。そんなときに出会ったのが神谷美恵子さんでした。大学二年生の時に何の気なしに書店で手にとったのが、『生きがいについて』（みすず書房）でした。この本は、瀬戸内にある長島愛生園という癩園（療養所）における患者さん達との触れ合いから生ま



れた著書で、最初の出版当時「生きがい」論ということで大きなブームを巻き起こしたそうです。

この本は、世間を知らない大学生には、最初教示的すぎる印象がありました。それは、神谷さん自身が付記に記しているように「自らをなまの形で語ることをむしろ避けることにとめた」からだったと思います。その後続けて出版された著作集で、遺著となった『遍歴』（みすず書房）や『存在の重み』（みすず書房）等のエッセイ集、日記・書簡集等を読んで、「なま」の神谷さんに触れたことで、神谷さんの世界にのめり込んでしまいました。

神谷美恵子さんは、一九一四年に後に文部大臣になった前田多門氏の長女として生まれました。少女時代にジュネーブに住み、また、新渡戸稲造先生と親交があるなど恵まれた生活を送っていたような印象がありますが、その生涯はご自身やご家族の病など多くの紆余曲折がありました。神谷

さんは、津田塾大学時代に当時死病とされた結核を病み、療養生活に入ったのですが、奇跡的に回復した後に医学を志します。それは、津田塾時代に訪れた癩療養所多摩全生園を訪れて大きなショックを受けて、医師になってこの人達のために働きたいという気持ちが生じた（『生きがいについて』より）のがひとつのきっかけでした。

父の仕事について渡米し、コロンビア大学で医学を学んだ後に帰国、女子医専（現在の東京女子医科大学）を卒業後に東京大学で精神科医として働き、終戦を迎えます。結婚後、夫神谷宣郎氏が大阪大学教授として赴任するのに伴い関西に移住し、一九五七年、四十三歳の時から長島愛生園で精神科の定期診療を始めます。以後病気で体が続かなくなる五十八歳になるまで診療を続けています。そして、子育てと診療と教育（神戸女学院から津田塾大学教授）の合間を縫って『生きがいについて』『人間をみつめて』（みすず書房、朝日選

書)『心の旅』(みすず書房、日本評論社)を始めとする数々の本を著しています。

神谷さんは、「家を持つ女にはいろいろな時期があるのだから何よりも粘りと弾力性を持ち、細く長く志を遂げていく工夫が必要と思う。」と語っています。主婦に限らず、人は仕事をもち家庭を持つと束縛が生じて必ずしも自分の思うようなことができなくなってしまう。神谷さんも、決して恵まれた境遇で自分の好きなこととしたことだけをして生きたのではなく、学生時代に芽生えた癩患者さんへの思いを四十歳を過ぎてからかなえています。私にもそのようなやりたいことができない時期がありました。志を持ち続け、(志をかなえる)工夫をしていけば、道はおのずから拓かれてくるものと信じます。

神谷さんはどのような本を読まれていたのでしょうか。神谷さん自身は、若い頃にお兄さまの影響でプラトンやパスカルのような古典を読んで

いたと書いています。そして、「若いとき、心が柔らかいときに、古典を読むことは何にもまして必要なこ

とだと信じます。」と語っていますが、その生い立ちから、日本や東洋ではなく西洋の古典に触れる機会が多かったようです。神谷さんの愛読書のひとつである「自省録 (TA EIS HEAUTON)」は、ローマ帝国の皇帝であり、ストア哲学者であったマルクス・アウレリウス (Marcus Aurelius) が折に触れて断片的に書き留めた手記です。この書物は「古代精神のもっとも高い倫理的産物」と評され、多くの人々の心の糧となりました。神谷さんはギリシャ語を独習してこの書物を読んだだけでなく、子育てのわずかな時間をさいて日本語に翻訳してしまいました。神谷さ



んの訳した『自省録』（岩波書店）は昭和三十一年に岩波文庫に収められ、ありがたいことに、その豊かな表現は、今でも私達の心に語りかけてくれます。

夫の宣郎さんが、神谷美恵子さんのことを「対外的には悩める人、病める人の側に立ち、対内的にはよき妻、よき母になろうとして、力の限りをつくした生涯であった」と書き記しています。その医師として教育者としての業績を知り、『生きがいについて』のようなその著書を読むと、神谷さんは雲の上の存在で、私達にはとうてい手の届かない方のように感じます。しかし、私達にとつてありがたいことに、神谷さんは、その間の心の葛藤を記した多くの文章を残しています。神谷さんが、まだ朝暗いうちから長島愛生園に診療に出かける時、子供と夫を犠牲にしているという意識に苛まれながらも、自分の裡に潜む厄介な「鬼」につき動かされて癩病の患者さんの診療に向かう

気持ち、両立し難いものを両立させようとして努力する姿が、日記やエッセイ集から垣間見ることができます。そして、その真摯な生きる姿は、いつも新鮮な輝きを放って語りかけてきます。私には神谷美恵子さんの魅力をお伝えするに十分な言葉がありませんが、その著書だけでなく、『神谷美恵子日記』（角川文庫）のような日記・エッセイ集から翻訳書に至るまでじっくりと読み、出会う価値がある方です。

神谷美恵子さんの作品の一部は、昨年から『神谷美恵子コレクション』（みすず書房）として新たに刊行が始まりました。しかし、残念なことに、私が探し回った熊本市内の中規模の書店では、ついに見つけることができませんでした。神谷さんの既に「古典」と言っても良いほどの作品集が、もつと多くの人の目に触れる事を念じています。

（熊本大学）

註 癩(らい)病：ハンセン病の旧称。その外見上の特徴や穢れ思想から差別や偏見の対象となり、患者は療養所に強制的に隔離された。現在では治療可能な病気であり、一九九六年にらい予防法は廃止された。しかし、一部では未だに偏見が

あり、二〇〇三年十一月に療養所入所者が黒川温泉のホテルで宿泊拒否された事件は記憶に新しい。本稿では、当時の時代背景を考慮して癩病と記することを許されたい。

“現場”の声を聴くこと 実践を物語ること

矢萩 恭子

『学びとケアで育つ 愛育養護学校の子ども・教師・親』(二〇〇五、津守眞 岩崎禎子ほか著、小学館)は一つの教育(保育)現場の日々の営み

を一冊の本にしたいという監修者佐藤学氏の願いから誕生した。書き手は教職員、実習生、旧職員、卒業生の保護者などこの学校にかかわる三十

名近い人々である。

実はかつて筆者も学生時代から数年間を愛育の保育の場で過ごさせてもらったのであるが、養護学校となってから今年で五十周年を迎えるというこの学校で行われている教育、と言うより子どもたちと保育者によって織り成されるここでの生活を他の人のように伝えたらよいのか語る言葉を探し得ないできたところがある。いわゆる「現場」で人と人とのかかわりのなかで起きていることや保育実践は、理論や技術の集大成としての言葉でクリアに言語化され、説明できる対象となることを拒む傾向がある。そこを本書は親も含めた複数の保育者がそれぞれ自分の言葉で、恐らく佐藤氏から「サクセス・ストーリー」としての記録ではなく、悩みや戸惑いや挫折を含むリアルなストーリーとして日々の経験を記述すること」という要望が出されるまでもなく、子どもと「私」と

の独自の物語としてありのままに書き、重ねるように連続して並べることによって表現している。

つまり、表現されているのは、同時進行的に或いは反省的に語られる子どもや子どもとかわる保育者自身の姿、双方の間に生まれる雰囲気や感情やつながり、迷いやためらいや辛さ、そしてそれらの変容する過程。あるいは子どもを生き生きと生かす環境やアートとして感じ取られる子どもたちの動きや活動、限りある命の灯をともし子どもとの日々、などである。

別の側面からは、養護学校の前身である愛育研究所の特別保育室の頃からかわってこられた津守眞理事長が展開する保育論、岩崎校長によるこの学校の基本、時間や空間、教材・教具の使い方、そしてカリキュラムなど学校運営に関する内容が語られている。

表題中の「学びとケア」の意味は本文に譲ると

して、学校という場で生きられる子どもと保育者との間に起こっていることについて保育者たちの語りに耳を傾けたとき、筆者には、その昔自分もそばで一緒に動いていたある保育者の寡黙なまでの姿の記憶と、本書での生々しい語りの表現に現われた当時の姿とのギャップが、真剣に子どもとかわかることについて圧倒的なりアリティをもつて迫ってきた。そして、先の発達心理学会のシンポジウムでのある研究者の報告が思い出されたのである。

それは、語る主体の身体が、言葉にすることを拒むような過去の強烈な体験を、言葉としては語り得ないにも拘わらず、映像に映るその人の動作を通してその抵抗をはっきりと表現している（彼は「身体が語らない言葉」と言っていたが）ものであった。人が過去の体験を語り出すときというのはどんなときか。そして

語ることによって現在はどうのように形作られ、子どもとの関係はどんな意味をもって立ち現われるのか。そんなことを考えた。

そのシンポジウムは、一九九〇年代から注目され始めたアプローチとされる現場（フィールド）心理学や質的研究に関するシンポジウムであった。質的研究に関する著述は近年非常に盛んであり、ほんの一部を挙げるだけでも、『フィールドワークの技法と実際 マイクロエスノグラフィ入門』（一九九九、箕浦康子 ミネルヴァ書房）『心理学の新しいかたち 方法への意識』（二〇〇二、下山晴彦、子安増生編著、誠信書房）『質的研究入門 へ人間の科学のための方法論』



（二〇〇二、ウヴェ・フリック著、春秋社）『質的心理学』（二〇〇四、無藤隆、やまだようこ、南博文、麻生武、サトウタツヤ編、新曜社）『保育実践のフィールド心理学』（二〇〇二、無藤隆、倉持清美編著、北大路書房）など次々と続く。さらにこの動きの中で、二〇〇四年九月には京都大学において「日本質的心理学会」が設立されているのも周知のことである。書店の書棚には、心理学の分野によらず、医療や看護、社会学、文化人類学など様々な分野にわたってフィールド研究、エスノグラフィという方法の衣をまとった背表紙が並ぶ。そして保育や教育の場を「フィールド」とした研究も、また然りである。

「フィールド」という言葉は、保育の「現場」にいた私には、この言葉で切り取ったその時点で入り込むとする世界を、独特な文化をもちそこに入り込む先として対象化してしまうように感じら

れる。翻って本書について見てみると、本書は、大勢の保育者が自分の経験したなりの語りを響かせ合うことで成り立っていて、読者は自ずとその様々な響きの中へ引き入れられてしまう。そこで鳴り響く調べから確かにこの学校で自己の存在感を得て自信をもって生活していくようになる子ども、学校や保育者に温かく受け入れられ生き生きと生活していくようになる子どもが目に見え

しかし不思議なことに、語りの主体にとつては、この本の響きのなかに身を置くことは実際何人かの著者も言っているように何かしつくりこない感覚も呼び覚ますようである。それは、自分自身の語りが現在とのつながりの中で新たに捉え直されることを余儀なくされるからであろう。

生きた現場の語りとは保育者自身に子どもや保育とのたゆまざる応答を迫ってくるということではないかと思われる。

（聖徳大学）

網野歴史学への誘い

榎田 二三子

精神の自由なつながり

昨年二月、「民衆の生活をもとにした新たな日本史像を描き出し……」と書かれた歴史学者網野喜彦についての計報を新聞で目にした。中学受験の年号暗記以来、歴史に対して苦手意識を持つ私は、網野氏について何も知らなかったのだが、

「民衆の生活をもとにした」という文言が目にとまったのだろう。自分の心に何か触れたものは、きっとそのうち生きてくると実感している私は、今回も心に留めておくことにした。

そして半年以上経ってから、『僕の叔父さん 網野喜彦』（中沢新一著、集英社新書）に出会うこととなった。宗教学者の中沢新一は、五歳のと

きに叔母の夫として網野氏と出会った。「叔父―甥」として、人類学でいわれる「冗談関係」を結んできたという。「おじ―甥、おば―姪」という

冗談関係の中では、年長者から権威が押し付けられたり、義務や強制が発生しにくいと言われている。そして年齢が離れていても、対等な関係における精神の自由なつながりの中から、重要な価値の伝達がされる。読者の中には、おじ・おばがたくさんいて、比較的年齢の近い叔父・叔母と親密な関係を結んだ経験を持つ方があるだろう。戦後日本の家族人数は減り続け、家族内の人間関係の減少について言及されるが、その陰で、親よりもっと自由な叔父・叔母との関わりをも失ったことは、残念である。

中沢氏と網野氏は、「新ちゃん」「おじちゃん」と呼び合う長年の冗談関係の中で、対等に語り合い、一つの主題を共同で考えるコラボレーション

をするまでになる。この本は、そのような二人のやりとりを中心に書かれ、網野歴史学の入門書的存在である。

中沢氏は、網野氏に民衆史のレッスン、歴史の読み方を教えてもらい、網野氏は自由に考えを語り合う中で自分の考え方やその道筋を形作っていった。自分の中で熟成させる作業と共に、異なる立場や視点をもつ他者との精神の自由なつながりにおける語り合いが、思索を触発すると実感させられる。

歴史の読み方から学ぶ

網野氏は、中世の歴史学者である。氏は、これまで光のあてられなかった民衆、その中でも非農業民に焦点をあてて歴史をとらえている。網野氏は、「歴史学とは過去を研究することで、現代人である自分を拘束している見えない権力の働きか

ら自由になるための確実な道を開いていくことである」と信じ、甥が「今の学問の世界に行き渡っているような常識に依存した」発言をすると厳しい口調で「自分の常識を押しつけるのは、ぜったいによくない」「どんな学問でも同じだ」と言った。また、網野氏の歴史学の出発点ともいべき

『蒙古襲来』（小学館文庫）で、平安時代と安土・桃山・江戸時代に挟まれた中世の社会を読み解いていこうとする姿勢として、「近世以降の社会、われわれが慣れ親しんできた社会との大きな違いがそこにあるので、ひとまずは「常識」をすべて、この時代に生きた人々の実態」を眺めようとして

している。
似たようなことは、保育についてもよく言われる。子どもたちに出会い、理解し、関わり合うとき、私たちは自分が持っている大人としての常識や価値観をできるだけ取り除き、出会うこと



を求められる。近年、親への支援の必要性が言われているが、親と関わるときはどうだろうか。私たちは、知らず知らずのうちに、自分が育った社会の影響を受け、社会の中で生活し、そこで自分を形作ってきた。時にはあまりに慣れ親しみに、自分のとらえ方が時代の影響を受けていることにすら気づかないこともある。戦後六十年間は、日本の社会がさまざまな点で急速に変化した時代と言ってよいだろう。十年の年齢差があれば、同じ社会現象を経験しても、そこでの経験の内容は異なる。当たり前と思っている常識や価値

観は、世代によって異なり、多様になっている。大人同士が理解し合おうとするときにも、時代背景を考慮し、自分の持つ常識や価値観を一度取り去ることが求められる。その上で、一人の子どもを見守り育む大人として、子どもたちに伝えるべき価値を協同で見いだす必要があるだろう。

日本人の野性

子育て中の親の話を知ると、こんな小さい子にそんなに叱っても……と思ったり、叱らなければならぬ悪いことは何だろうと思うことがある。親が「悪い」と思うものと、子どものもっている自然性や野性というものとのギャップを感じるのである。

中世、「悪源太」、「悪左府」という呼び名に含まれている「悪」には、道徳的評価は含まれず、異常といえる激しさや強さをそのように表現して

いたという。今でも使われる「わるいやつ」には、道徳的評価は含まれず、「いたずらもの」の意に使われるが、それに近いものであったらしい。網野氏は、日本人の野性が蔓延していた最後の時代として中世をとらえ、『蒙古襲来』を書いた。

そして、悪や日本人の野性を考えるきっかけが、中沢新一の父、中沢厚氏との「飛礫」をめぐる語り合いであった。中世、悪党たちはまず礫を飛ばし、相手をひるませて戦った。戦後では、学生運動が盛んであった頃、学生たちが自衛隊に投石していたのを思い出す。他国にも見られる「飛礫を打つ」という行為に、「人類の根源的な衝動」を感じ、「動物から原始の人間を区別した本質的なもの」であり「根源的な人間的行為であること」を中沢氏は、見ようとしている。

早くは探索行動を始めた頃から、悪いこと、

やってはいけないこととして、その行為を止められ、発露しないようにとしつけられる子どもたちがいる。子どもが子どもとしてある、その自然な姿が大人社会の価値観で強く否定される。網野歴

史学は、大人の社会が「悪」ととらえるものには、人の自然性や野性の発露が含まれるということに気づかせてくれる。

(武蔵野大学)

マイ・ダイアリー二人の〈女の子〉

菅 聡子

子どもの頃、私はスウェーデン人になりたかった。ヘアストリッド・リンドグレーンの国の人になりたかったのだ。初めてリンドグレーンの作

品にふれたのは、小学校低学年の頃だ。クリスマス朝、目が覚めると枕元に『長くつ下のピッピ』(大塚勇三訳、岩波書店)が置かれていた。

一読して夢中になり、以後、ことあるごとに親にねだつて、当時岩波書店から出版されていたリンドグリーン作品を読破した。だが、どうもリンドグリーン作品はさらに何冊もあるらしい。子どもなりにそう気づいたが、手に入れる方法がない（当時はまだ数冊しか翻訳されていなかった）。そこで、「スウェーデン人になりたい！」と短絡的に思ったのだった。

だが先日、三瓶恵子『ピッピの生みの親 アストリッド・リンドグリーン』（岩波書店、一九九九）を読んで、『長くつ下のピッピ』が書かれたのが一九四五年であることを知り、私は少々衝撃を受けた。日本が帝国主義・軍国主義のはての敗戦を迎えていたとき、はるかスウェーデンの地では、すでに「世界一つよい女の子」が誕生していたのだ。もちろん、現在の知見からは、ピッピといえども人種差別的視線から自由ではないことが

指摘されてもしているが、しかし、のちに日本の少女たちをエンカレッジすることになる「世界一つよい女の子」がまさに一九四五年に生まれてきたことは、決して偶然とは思えない。

三瓶氏の著書によれば、リンドグリーンは一九七〇年代以降、社会批評家としても活躍している。一九七六年、総選挙を前に、政府が提示していた「限界所得税の課税方式」のおかしさを、「ボンペリポッサ物語」という寓話の形で新聞紙上に発表し、たちまち国中の反響を呼んだのである。リンドグリーンは一九〇七年生まれだから、このときすでに七十歳になるうとしている。そして以後、積極的に社会的発言を行っているのである。なんとも元気な「おばあちゃま」ではないか。リンドグリーンの大ファンを公言していた私であるが、実はこれまで、リンドグリーンその人についてはほとんど何も知らなかった。三瓶氏の

著書を通じて知ることのできたリンドグレーンの姿は、私がイメージしていたリンドグレーン像をはるかに凌駕する、魅力的なものだった。

だが、作者の実像が、作品を読んでイメージしていたそれと大きく異なることもある。小倉千加子『赤毛のアン』の秘密』（岩波書店、二〇〇

四）を読んでもっとも驚いたのは、作者ルー

シー・モード・モンゴメリの死が自殺であったことだ。ただ、『炉辺荘のアン』が絶筆だったと知って、妙に納得がいったのも確かである。多くの日本人女性のご多分にもれず、私もヘアン・シリーズの一〇冊を繰り返し読んだクチであるが、『炉辺荘のアン』の読後感は、けっして心地よいものではなく、なんとなく不穏なものを感じたからである。それはおそらく、家庭の主婦としてのアンの姿に、なにか破綻の影を感じたからかもしれない。なによりアン自身が、自らを偽っている

ような印象を受けるのである。

もっとも、私が愛したアンは、厳密に言えば第一作のアンなのだった。初対面のときからその旺盛なおしゃべりではにかみやのマシユウを魅了し、目の前の風景を「歓喜の白路」「輝く湖水」と名づけるアン。自らの「赤毛」に対するコンプレックスを正直に告白するアン。日常的な騒動を起こしつつ、マリヤやリンド夫人を次々と味方につけていくアン。ダイアナと「腹心の友」の誓いかわし、へ女の子と土士の友情を実践してみせるアン。へ女の敵は女を標榜したのはショウペ



ンハウアーだが、アンの住む世界では、女性同士の信頼と友情がその基盤にあった。

ただ、第一作においても、このようなアンが徐々にいわば飼いやられていき、へ良妻賢母的な女性へと教育されていく過程が描かれていても読める。現在のフェミニズム批評においては、たとえばマッシュウの女性化によって可能となるシスターフッドの世界のなかで、アンが当時の常識的な女性像へと回収されていく点に、この作品の限界が指摘されるもしている。第一作が書かれたのが一九〇八年であることを思えば、そのような時代のコードが物語構造に内在するのはいたしかたない。西洋文化においては、へ赤毛へは秩序からの逸脱を示す記号だそうだが、アンの髪の毛が、成長するにしたがって茶褐色へと近づいていくのもむべなるかな、と言えるだろう。

だが、作品の末尾近くでマッシュウが言う、「わ

しには十二人の男の子よりもお前一人のほうがいいよ」という言葉は、永遠にへ女の子へたちを力づける。「いいかい？—十二人の男の子よりいいんだからね。そうさな、エイヴリーの奨学金をとったのは男の子じゃなくて、女の子ではなかったかな？ 女の子だったじゃないか—わしの娘じゃないか—わしのじまんの娘じゃないか」。リンドグレンは赤毛のアンの大ファンで、ピッピのイメージはアンから来ているという。想像力が豊かで、マリラやマッシュウの生活に大きな喜びをもたらしたアンは、やがて「世界一つよい女の子」。ピッピを生み出した。そしてピッピに元気づけられた読者たちはまた、次の物語を生み出していくに違いない。

（お茶の水女子大学）

*本文引用は『赤毛のアン』（村岡花子訳、新潮文庫）による。

編 集 後 記

子どもの目と大人の目は、どうしてこんなに違うのだろうかとよく考える。子どもの目はむしろ動物の目に似ていることが、矢野先生の文章を読んできて腑に落ちた。今起こっていることだけを見つめて、すぐ何にもおどろく目だ。子どものような目をしている大人に出会うことはめつたにない。たまに出会うと、ちょっと奇異な印象が伴うから不思議だ。頭ではそのような人間にそこがれているというのに……。芸術は爆発だ、と言っていた芸術家は、子どもの目を持っていたような気がする。子どもは野性を生き、いつしか大人になったときには野性を対象化する

ようになる。保育者の目の前には、子どもという野性がいつもあるというのに、その野性に寄り添って生きることが難しくなっている。

子どもの写真について荒川先生の連載が始まった。写真は人に時間との新しい関係を切り拓いてみせた。旅先や行事などで、親は子どもの姿を写真やビデオにおさめようとつい一生懸命になる。子どもの今を切り取って未来に運ぼうとしている。子どもの身体と共振して楽しめない大人が、いつか振り返って楽しむことを楽しみにして。(浜口)

●本誌を読んでのご感想やご意見をどをお寄せください。メールでも受け付けたいと存じます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

youjinai@yahoo.co.jp

幼 児 の 教 育

第一〇四巻 第八号

(二〇〇五年八月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十七年八月一日

編集兼発行人 浜口順子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-1-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一-四一九

☎〇三-五三九五-六六一三(営業)

☎〇三-五三九五-六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇-11-196400

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

最

新

刊

子どもの創造力を育み、アート感覚を養う本

はちみつ の じかん

—子どもの造形には物語がある—

「すてきなステッキ」

「まどぎわえほん」

「いたずらっこのぞきあな」

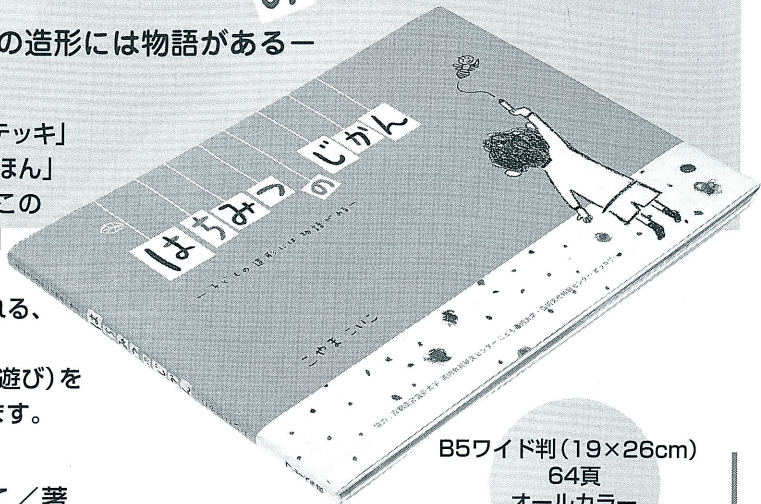
など、

創造性あふれる、

造形作品の

創り方(造形遊び)を

紹介しています。



B5ワイド判(19×26cm)

64頁

オールカラー

定価1,680円(税込)

●こやま こいこ／著

●京都造形芸術大学芸術教育研究センター子ども芸術大学
芸術文化情報センターピッコリー／協力



構成

PART1 はいひんへんしん

PART2 紙でつくる

PART3 色をたのしむ

PART4 自然の中から

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

最

新

刊

「気になる」 から はじめる

保育学からの
親子支援

臨床保育

土谷みち子 編著
太田 光洋



「保育者を元気にする本」ができました。この本は、保育者が親子支援・子育て支援に、元気に楽しく取り組めることを願って書かれたものです。

「気になる」をキーワードに、親子支援・子育て支援の現場を第一線で支えている保育者の実践を多数紹介し、「気になる」ことについて保育者がどんな見立てを行い、どんな支援をしていったのかを詳しく述べています。子どもの命の輝きを引き出し、人生の土台を支えている保育者。そんな保育者に向けてエールを送るものです。

21×15cm/256頁
定価1,785円(税込)

【目次から】

- 序章 臨床保育とは
- 第1章 子どもが「気になる」
- 第2章 親が「気になる」
- 第3章 親子関係が「気になる」
- 第4章 保育者の環境が「気になる」
- 第5章 子育ての支援環境が「気になる」
- 第6章 「気になる」とはどのようなことか

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五二四円)☆